松江歴史館NEWS

MATSU REKI

第2号
2021.冬

企画展「松江藩と絵図」開催特報！

藤岡大拙 名誉館長
歴史コラム
新連載！

Contents

2 企画展「松江藩と絵図」開催特報
3 スポット展示・ミニ展示のご紹介
4 松江おもしろ談義ダイジェスト
5 コラム「雲陽秘事記あらかると」第１回（名誉館長 藤岡大拙）
6 新収蔵品紹介
7 ミュージアムショップ縁雫紹介
おうちミュージアムの取り組みについて
8 【シリーズ】地域ゆかりの資料紹介 -玉湯町編-

企画展

「松江藩と絵図」

開催特報！

およそ二〇〇年前の文政四年（一八二一）、伊能忠敬の全国測量事業により完成した日本図「大日本沿海輿地全図」（伊能図）が幕府に上呈されました。この測量隊が必要とする絵図を作製した神田助右衛門親子は、藩領内を測量し、伊能図をしのぐ正確さを誇る松江藩領の「十郡絵図」を作製して、文政四年にはその小絵図を藩に提出しています。本展では、このような国絵図のほか郡絵図や城絵図など松江藩内の多様な絵図（絵画的表現を用いた地図）の一端を展観し、江戸時代に多くの地図が作製されて広まっていく様子をたどります。

伊能忠敬の日本図をしのぐ正確さ

出雲国十郡絵図

（島根県立図書館蔵）

出雲国のうち支藩の広瀬・母里両藩を除く松江藩領内を、郡ごとに平地を色分けし、村境を破線で画して、山や川などの地形を描いています。本図余白の記載などから、神田助右衛門（二代武兵衛）が藩命により文化３年（1806）から文政３年（1820）にかけて、息子新二の協力を得て測量して作製した藩領内の大絵図を、翌４年（1821）に縮写した小絵図であることがわかります。伊能図をしのぐ正確さで、神田助右衛門の絵図作製能力の高さがうかがえます。

参勤交代の距離や交通情報が一目でわかる

寸里道地図（松江から出雲郷付近）

（松江歴史館蔵）

松江藩の道中吟味役足軽として参勤交代の手配をした神田助右衛門（初代）が、天明２年（1782）に道中の距離や交通情報を一目でわかるように工夫して作製した珍しい地図です。一町（丁）刻みの目盛を用いて松江と江戸の間の距離を示し、人馬賃銭や船賃など街道の情報が記されていて、八つ折りすると縦16.5cm、横7cmの小型サイズになります。この頃の藩主松平治郷（不昧）が参勤交代する際に、携帯して活用したことでしょう。

浮世絵師による
想像力豊かな日本の鳥瞰図も！

日本名所之絵（日本鳥瞰図）　鍬形蕙斎作（個人蔵）

会期等情報

企画展
「松江藩と絵図 -花開いた地図の世界-」

令和4年(2022)
2/4(金)－4/10(日)

休 館 日　毎週月曜日
※ただし3/21（月･祝）は開館、3/22（火）が休館日。
開館時間　9:00~17:00(観覧受付は16:30まで)
会　　場　松江歴史館　企画展示室
主　　催　松江歴史館
観 覧 料　大人500円(400円)
　　小･中学生250円(200円)

※基本展示室とのセット券:料金は大人800円(640円)、小･中学生400円(320円)
※(　)内は20名以上の団体料金
※高校･大学･専門学校に通う学生は学生証の提示で企画展示(または基本展示とのセット券)が団体料金

講演会　聴講無料
会場:松江歴史館 歴史の指南所
定員:各60名(先着順)、要申込
時間:各回とも14:00～15:30

2/12(土)　「江戸時代に花開く地図の世界」
講師:上杉 和央 氏(京都府立大学 准教授)
2/23(水･祝)　「江戸後期の地図事情と神田家」
講師:岡 宏三 氏(島根県立古代出雲歴史博物館 専門学芸員)
3/6(日)　「斐伊川東流　新たな知見」
講師:大矢 幸雄 氏(松江市史編さん委員〔絵図･地図部会長〕)

ギャラリートーク
担当学芸員による展示解説を行います。
2/6(日)、2/20(日)、3/13(日)
時間：14:00 ～ 15:00　会場：企画展示室
年間パスポートまたは企画展鑑賞券が必要。

※各種イベントの詳細は企画展チラシやホームページで随時ご案内します。また、新型コロナウイルス感染症の影響により予定を変更する場合があります。

スポット展示・ミニ展示の紹介

スポット展示とミニ展示は、新収蔵品や最新の研究にまつわる資料、四季にあわせた作品などを特集展示する館内の小さな展示スペースです。おおよそ２ヶ月に一度、展示替えをしています。

スポット展示

松江のものづくり

藍染木綿

前半の展示では、藍染木綿を紹介します。出雲地方では、嫁入り道具や出産祝いに木綿地に吉祥文を藍染めしたものを贈る風習がありました。産湯に浸かった赤ん坊をくるむ布の「湯あげ」は、鶴と亀や松竹梅などのめでたい文様を藍染筒描で染め、赤く染め分けられた端の赤い部分で顔を拭くと丈夫な子に育つと言われていました。ここでは、孫ごしらえ（出産祝い）として作られた、湯あげ・子負帯（おんぶ紐）・むつき（おむつ）など5点を展示します。

木地師・2代小林幸八の仕事

後半の展示では、松江市八雲町熊野出身の木地師・2代小林幸八（本名：安達真市、1878-1935）の仕事を紹介します。初代小林幸八に木工轆轤を習った2代幸八は、盆や蓋物、棗、香合を多く制作し、数々の賞を受賞しました。塗師の5代小島漆壷斎の木地も挽いています。2代幸八が使用した道具や未完成品などは、一括で松江市の指定文化財（有形民俗文化財）となっています。本展では市指定の道具などの一部を展示します。

波錨文おおむつき（松江歴史館蔵）

刻みたばこ入れ（未完成品）
2代小林幸八作（松江市蔵）

会場：基本展示室最終コーナー（要基本展示観覧券）
会期：藍染木綿　11月30日(火)～令和4年(2022)1月30日(日)
　　木地師・2代小林幸八の仕事　2月1日(火)～4月3日(日)

ミニ展示

新春展示「虎」
―若槻禮次郎コレクション―

令和4年（2022）は寅年です。松江出身の総理大臣若槻禮次郎が所蔵していた虎の絵で年頭を飾ります。この絵は禮次郎が総理大臣になった祝いとして、出雲市平田町の大谷弥吉が郷土の画家である小村大雲作の虎の絵を贈ったものです。禮次郎は慶応3年（1867）の寅年生まれです。禮次郎の支援者であった大谷は、そのことをわかった上で禮次郎に贈ったのでしょう。

虎図
小村大雲画
（若槻家蔵）

会期：12月28日（火）～令和4年（2022）2月27日（日）
会場：展示室前展示ホール（観覧無料）

企画展「松江藩と絵図」関連ミニ展示

旅と地図を広めた木版印刷
―「出雲神社巡拝記」とその版木―

江戸時代中期以降、お伊勢参りに代表される社寺巡礼が人気となる中で、人々を旅へと誘い、旅の手助けとなる旅行案内記（ガイドブック）の刊行が全国的に盛んになり、地図も数多く出版されていきます。この出版事業を支えたのが木版印刷の技術です。天保4年（1833）刊行の「出雲神社巡拝記」は出雲国内の399の神社を巡拝するための旅行案内記で、木版印刷に使われた75枚の版木が残っています。旅を支えた出版文化を垣間見ます。

会期：令和4年(2022)
　　3月1日(火)～4月3日(日)
会場：展示室前展示ホール
　　（観覧無料）

出雲神社巡拝記の版本と版本
（松江歴史館蔵）

基本展示室も展示替えがあります

基本展示観覧料　大人510円
小・中学生250円（20名以上の団体は2割引）

年間パスポート　大人1,560円
小・中学生780円
基本展示と企画展示、松江ホーランエンヤ伝承館が1年間何度でも観覧無料

松江藩の歴史や文化を紹介する基本展示室（常設展示）では、お越しいただくたびに楽しんでいただけるよう、3か月に一度、大名行列図や町絵図、刀剣などの資料を替えています。詳しいスケジュールなどは随時ホームページでご案内しています。

松江おもしろ談義 ダイジェスト

歴史をたずねる・美術にしたしむ

松江歴史館では、松江の歴史やゆかりの美術に関する講座「松江おもしろ談義」を開催しています。学芸員による1時間の講座で、毎月1回、異なるテーマでお話ししています。ここでは、本年5月、6月、7月に開催した講座のダイジェストをお届けします。

5月 「淞高の創設に関わった松江の人々」

講師　主任学芸員　新庄正典

明治後期以降、山陰への高等教育機関の設置が切望されます。大正7年(1918)にようやく鳥取県に高等農林学校の設置が決定しました。先を越された島根県は、県内外の有力者が運動し、地域の発展を目的として高等学校を誘致して、翌年に旧制松江高等学校の設置が決定するのです。ただし、設置には国へ創設費の寄付が必要であり、県内外の有力者や地元の八束郡の人々から約35万円を集め、開校することになりました。旧制松江高等学校は、地域の発展に結び付けたいという地元の人々の想いにより設置され、島根大学となった今でも多くの人材を育て上げています。

6月 「漆の世界 ～蒔絵について～」

講師　副主任学芸員　大多和弥生

蒔絵は、文様を漆で描き、その漆が固まらないうちに、金･銀などの金属粉を蒔きつけて絵を表すものです。平安時代以降、日本の装飾技法として発達してきました。研出蒔絵･平蒔絵･高蒔絵と呼ばれる技法を組み合わせて風景や文様を立体的に表します。本講座では、当館所蔵の蒔絵作品４点(梨子地籬菊文蒔絵鞍･鐙、三保富士薩埵清見図蒔絵印籠〔勝軍木庵光英作〕【図1】、春草蒔絵菓子重〔勝軍木庵光英 作〕【図2】、菊文棗〔小島漆壺斎作〕)を取り上げて、技法や見どころについて画像を用いながらご紹介しました。

【図1】

【図2】

7月 「松江藩の工芸文化 －不昧の職方について－」

講師　学芸専門監　藤間寛

茶道文化の特徴の一つにお好み茶器の制作があります。一品制作ではじまったお好み物は、やがて茶道人口の増加や家元制度が確立するにつれ数物の茶器制作となり、千家流の職方(職家)の千家十職が有名です。不昧にも好みの茶器を作る以下の職方がいました。

1 陶芸
楽山焼(長岡住右衛門)、布志名焼(土屋善四郎・雲善、永原与蔵)

2 漆工
原羊遊斎、小島漆壺斎、中山胡民、岸一閑、松枝不入

3 木工
小林如泥、玉川又徹

4 金工
二代下間庄兵衛、高橋因幡、金屋五郎三郎

不昧の指導のもと出雲地方に工芸文化が醸成され、全国に誇る工芸技術が育ったのです。

今後の予定

今年度はのこり4回開催を予定しています。(令和3年〔2021〕12/12〔日〕、令和4年〔2022〕1/23〔日〕、2/13〔日〕、3/13〔日〕)演題や講師は市報や当館ホームページで随時ご案内します。ぜひご参加ください。

時　間　14:00～15:00
定　員　60名(要申込、無料)
申込先　松江歴史館 (TEL 0852-32-1607)

※新型コロナウイルス感染症の影響等により予定が変更になる場合があります。

雲陽秘事記

あらかると

松江歴史館
名誉館長
藤岡 大拙

松江藩には雲陽秘事記という奇書があります。何時、誰が著したか分かりませんが、松江藩松平家初代直政から六代宗衍の時代までが取り扱われ、後、八代斉恒までが追記されています。内容は藩主の逸話、家臣の勲功譚、寺社縁起、奇聞伝説、その他巷間の世間話等々、多岐にわたっていますが、虚実混淆の憾みがあるとはいえ、よく吟味して読むと、松江藩の歴史の深叢に分け入ることができます。藩主の私行を暴露したり、揶揄したりした部分があり、そのため公にせず、お互いに書写して密かに閲覧していたものと思われます。したがって、版本は見当たらず、多数の写本が図書館や個人宅で保管されています。収録されている話は約二百話にも及びます。これから毎号、その中から興味あるものをご紹介したいと思います。

第１話

宗衍の自慢

松江藩松平家六代藩主松平宗衍は江戸城内の殿中で、同席の大名たちに話しかけた。「手前の領国出雲には、長さ三尺（約一メートル）の鮒や茶釜のような蕪、長さ六尺もの藤の花房があります」と、かなり誇大に自慢した。同席の大名たちは、「ほほー、そのような見事なものがござるなら、ぜひとも所望したい」と口をそろえた。

江戸の藩邸からは、さっそく国元に伝令がとび、早々に探し求めて送ってくれとのこと。松江の藩庁では大いに驚き、さっそく国内を探したところ、三尺の鮒は神門郡神西湖（出雲市西部）から、六尺の藤の花は市成の御立山（松江市西川津町）の藤棚から、そして茶釜のごとき蕪は、楯縫郡平田村（出雲市平田町）の百姓の牛小屋の後ろから、それぞれ見出して江戸へ送ったとのことである。

【筆者評】宗衍は出まかせで話したかもしれません。でも、現実に藩内を探したらあったのですから、そんなにでたらめでもなかったのです。ここで重要なことは、宗衍の出雲を売り込まんとする積極性です。謙譲をもって美徳とする出雲人気質を、リーダーは打ち破ろうとしています。宗衍の知られぬ一面がのぞいている逸話です。

新 MATSUE REKISHIKAN 収蔵品紹介

松江歴史館では、歴史資料や美術作品などを中心に、収集方針に基づいて資料の収集を行っています。松江市域あるいは江戸時代の出雲国の歴史や文化を語る上で欠かせない資料、そして山陰地域さらに日本または世界の歴史や文化にとって重要な資料などが地域から失われるのを防ぎ、後世へ受け継ぐとともに、その価値を調査・研究・展示によって発信していきます。

堀尾忠晴書状（令和2年度 購入）

寛永10年（1633）7月2日付で、松江藩主堀尾忠晴が石見銀山奉行の竹村貞清・万嘉父子に宛てた書状です。内容は、幕府からの巡検使が無事に石見国を通過し隠岐国に向かったという情報提供に感謝し、来年の将軍徳川家光の上洛が早まりそうだと伝えています。忠晴は、この2か月後の9月20日に江戸で死去します。忠晴が出した現存する最後の書状であり、江戸での忠晴の動きや、山陰の情勢を知ることができる貴重な資料です。

堀尾忠晴が遺した現存する最後の書状

山口半六関係資料（令和2年度 寄贈）

山口半六（1858-1900）は、重要文化財である第四高等中学校（金沢市）や第五高等中学校（熊本市）を設計した明治を代表する建築家です。松江藩士山口軍兵衛の子として松江で生まれました。当館で令和元年に松江藩士山口家を特集する特別展を行い、半六の子孫の方から写真等を含む資料の寄贈を受けました。紹介する写真は、晩年（41才）の半六と明治27年（1894）に写した山口家の家族写真です。家族写真には2歳の山口多聞（海軍中将、半六の甥）の姿もあります。

松江が生んだ明治時代の建築家の資料

美保関沖事件関係資料（令和元年度 寄贈）

昭和2年（1927）8月24日夜中、松江市美保関の沖合において無灯火で軍事演習を行っていた大日本帝国連合艦隊60余隻のうち軍艦4隻が衝突し、119名の死者と多数の負傷者を出しました。2年後、美保関町民らの義援金により、美保関五本松公園に日本海軍を象徴する軍艦マスト型の慰霊塔が建設され、戦後「平和祈念塔」と名を変え現存しています。事件当日からの関連資料一式で、遺族から提出された101名分の遺影もあります。元松江観光文化プロデューサーの高橋一清氏から寄贈を受けました。

美保関沖で起こった軍事演習中の悲劇

01

ミュージアムショップ「縁雫（えにしずく）」にお越しください

松江に降る雨はご縁を運ぶ「縁雫」。ミュージアムショップ縁雫では、常設展示や企画展示に関連する図録や、松江の歴史や文化に関する各種出版物を販売するほか、地元作家による和風の小物や雑貨、松江ならではの「茶の湯の文化」を感じる銘茶や、オリジナル「えにしずく」関連グッズなどを販売しています。書店では手に入りにくい松江の歴史・文化に関する各種出版物、市内観光や街歩きに役立つ観光ガイド本などを取り揃えています。このような商品以外にも、近隣の観光施設にないこだわりの商品を多数販売していますので、ぜひご来店ください。

松江市の花・椿をあしらったグッズが人気です。贈り物などにもどうぞ。

ミュージアムショップ縁雫への来店に入館料等はかかりません。お気軽にお越しください。

書籍は発送での販売も行っています。詳しくは当館ホームページをご覧ください。

02

おうちでたのしくまなべる おうちミュージアム にアクセスしてみよう！

小学生のみなさん向けに大名行列図から武士を探すゲームなどを公開！

収蔵品データベースで館蔵品を楽しむこともできます。

幼児のみなさん向けにぬりえもあります。大人も楽しめる難しいぬりえもあります。

松江歴史館のおうちミュージアムはこちら

最新の展示について詳しいガイドもご用意。

新型コロナウイルス感染症の影響で、気軽に出かけることのできない日々が続いています。そのような中で北海道博物館（北海道札幌市）が令和2年（2020）3月に始めた「おうちミュージアム」では、学校や幼稚園が休みになりおうちで過ごす時間が増えた子どもたちのために、インターネットからダウンロードできるコンテンツ（ぬりえや工作、ゲームなど）が公開されています。「おうちミュージアム」は北海道博物館の呼びかけによって、またたくまに全国のミュージアムに広まり、松江歴史館も令和2年（2020）5月から参加しています。

当館の「おうちミュージアム」では感染症の影響などにより当館にお越しいただくことが難しい大人の方に向けても、過去の展示の鑑賞ガイドや、研究紀要の一部を公開しています。ぜひお楽しみください。

地域ゆかりの資料紹介

わがとこに、何があーかね？【玉湯町編】

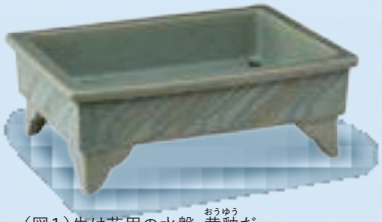
出雲弁で「わたしたちの地域に何があるの？」という意味。

松江歴史館は、松江市域ゆかりの歴史資料や美術作品を多数収蔵しています。このシリーズでは、収蔵資料や近年調査した資料などを地域ごとに紹介します。今回は布志名焼について館蔵資料を基に紹介します。

宍道湖畔の風光明媚な地・玉湯町布志名（松江市玉湯町）には、江戸時代より続く布志名焼があります。薄黄色の釉薬がかかった陶器でよく知られており、松江市民のみなさんのお家にもあるのではないでしょうか。布志名焼の窯は、元々かわらけなどを焼いていたそうですが、江戸時代後期に松江藩松平家七代藩主・松平治郷（号 不昧）の指導によって土屋窯・永原窯が発展し、楽山窯（松江市西川津町）の楽山焼とともに藩主お好みの茶陶などを作るようになりました。また、藩お抱えの窯だけでなく民間の窯もあり日用陶器などを製作し発展していきます。明治時代になると藩の庇護がなくなりますが、輸出陶器などの需要によって明治時代後期にかけて布志名焼はたいへん栄えました。

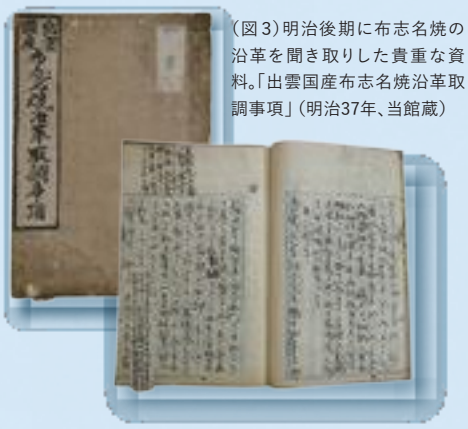
当館が所蔵している資料「出雲国産布志名焼沿革取調事項」（明治三十七年〔一九〇四〕、図3）は、布志名焼各窯の古老たちに窯の沿革や現況を聞き書きした資料で、松江商業学校の生徒が卒業を記念し記録を試みたものです。各窯の伝来のみならず材料の土の産地、釉薬の開発者などにも触れられています。本資料はさらに明治三十四年度の収支額や、外国への輸出の状況が詳しく記されている点が貴重です。

最盛期の明治二十八年（一八九五）には十八軒あった窯元も、大正時代以降の全国的な不況の影響等で統廃合や廃業に迫られ、当時からある窯は現在は雲善窯と灘舩木窯のみとなりました。そのような中でも大正時代に湯町窯が創業し、昭和に入り民藝運動に関わるなど新たな盛り上がりも見せていました。今でも伝統を受け継ぎながら新しいスタイルの陶器を生み出すなど、島根県を代表する工芸品のひとつとして布志名焼は作られ続けています。



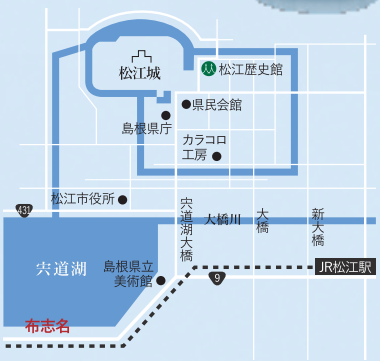
（図1）生け花用の水盤。黄釉だけでなくこのような呉須釉も布志名焼では使われました。「布志名焼青釉水盤」永原与蔵作（江戸時代後期、当館蔵）

（図2）明治34年頃に作られた黄釉の花瓶で、宮家の北白川家が所蔵していました。「布志名焼龍図花瓶」若山印（明治時代後期、当館蔵）



（図3）明治後期に布志名焼の沿革を聞き取りした貴重な資料。「出雲国産布志名焼沿革取調事項」（明治37年、当館蔵）

（図4）布志名焼の日用陶器は松江の各家庭で好まれました。「布志名焼飴釉手あぶり」（当館蔵）「布志名焼色絵甕図徳利」（製陶舎印、明治時代、当館蔵）



松江歴史館では、令和４年度春に出雲地方の民藝に関する企画展を予定しています。

松江歴史館NEWS
MATSUREKI
第２号
【2021・冬】
発行／
松江市立 松江歴史館
〒690-0887 島根県松江市殿町279番地
TEL 0852-32-1607
https://matsu-reki.jp/
フェイスブック、ツイッターでも最新情報を配信中